

美術解剖学教育に必要とされる図版の制作と理解を円滑にするための方法の研究

大阪芸術大学 教養課程 准教授 小田 隆

美術解剖学は美術制作における基礎的な部分を担っているものであるが、研究のできる大学は少なく、教育に携わる人材も不足している。昨今、ゲームやアニメーション、漫画などのエンターテインメント業界でも、美術解剖学に対する要望は大きい、学ぶことのできる機関、教えられる人材が不足しているのが現状である。それらの問題を解決するためにも、詳しく描かれ、様々な角度から見る事ができる美しい図版が必要であり、初学者にもわかりやすい簡潔な解説文も必須である。

これまでも美術解剖学は西洋を中心に発展してきた、数多くの図版や書籍が作られてきていて、多くの知見を得ることはできるが、それらの情報を読み解き精査することも、ある一定の知識を要求される部分がある。

人体を描く、造形するといった場合、全ての解剖学的知識が必要なわけではなく、重要な要素は限られてくる。また、伝統的な絵画や彫刻とエンターテインメント系のイラストレーション、アニメーション、漫画などでは、要求される部分も異なってくる事が考えられる。

この研究では、実際にモデルを使って人体を描くことに重きを置いている。どれだけ解剖学的な知識があり、人体の内部構造をイメージできていたとしても、現実に存在する人体の体表に現れる様々な情報を観察することができなければ、表現と知識を結びつけることはできない。

今年度は10月から11月にかけて、合計6週にわたってヌードモデルを描く機会を作ることができた。モデルを頼む場合、通常、6ポーズがひとつの単位となる。1ポーズあたり20分、休憩を10分として、2コマの授業時間でちょうどおさまる回数である。20分は1ポーズでも良いし、5分4ポーズ、10分2ポーズ、2分10ポーズのようにバリエーションをつけてもらうこともできる。長くじっくり描きたい時は、3ポーズ続けて、同じ固定ポーズをリクエストすることも可能である。当然、途中で休憩を挟むことは必要となる。一連の制作では、通常、前半の3ポーズは短時間のクロッキーを、後半の3ポーズは固定ポーズとし、60分で1枚を描くデッサンというスケジュールで進めていった。

クロッキーやデッサンには様々なスタイルがあるが、この研究では体表のレリーフを忠実に再現することに重点を置いている。短時間でのクロッキーでは全身のプロポーション、ポーズのジェスチャー、シルエットなど、大きく捉えることをしつつ、長時間のデッサンでは細部の詳細な記録を重視して進めていった。

また、男女のモデルをバランスよく描くように、モデル事務所へはモデルの手配をお願いした。女性モデルと男性モデルを各週で入れ替えるように順番に來てもらった。各モデルは全て別人であり、6人の異な

った体格の人体を描くことができ、それぞれの持つ特徴を記録として残すことができた。

今年度のテーマである「体幹」は特に男女の性差が大きくでるところである。骨格の特徴、筋肉のつき方、脂肪の存在、男女で大きく違う部分が多くある。クロッキーでは全体的な特徴の違いを、デッサンでは細部の違いを重点的に制作し、特にデッサンは全身を描くことなく体幹の部分に特化したデッサンを繰り返した。

体幹には胸郭と骨盤という強固な構造体があるが、その両者を腰椎がつなぎ、体の運動に柔軟性を与えている。椎間関節での胸郭を伴う脊柱の屈曲と伸展、椎間関節での胸郭の側屈、椎間関節での胸郭の回転、骨盤の前方、後方への傾き、腰仙関節での骨盤の側屈、腰仙関節と腰椎椎間関節での骨盤の回旋の組み合わせが、体幹の姿勢に豊かな表情を作り上げる。さらに、上肢に属する肩甲骨、鎖骨の運動、頸椎関節での頭と頸の屈曲と伸展、頸椎関節での頭と頸の側屈、頸椎関節での頭と頸の回旋などが加わり、より一層、複雑な表情を見せる。骨格だけに焦点を当ててもこれだけの変化を伴うが、さらに筋肉と脂肪が形作るレリーフを観察し捉えることは困難である。

ポーズのバリエーションも、立ちポーズ、座りポーズ、寝ポーズと週ごとに設定を決めていった。立ちポーズでは、左右の重心に差をつける、ひねる動作を加える、座りポーズでは、椅子に座る、床に座る、寝ポーズではうつ伏せ、仰向けといった具合に、モデルに無理のない姿勢をとってもらい描くことができた。

60分のデッサンでは、手早く制作を進めるため、色画用紙にコンテ、パステル、色鉛筆などを使って描写した。コンテやパステルは広い面積を描くことを容易にし、色画用紙を支持体とすることで、トーンの表現に幅を持たせることができた。

フリーランスのモデルにお願いして、様々なポーズの写真撮影を行うこともできた。ライティングをすることで、体表のレリーフをよりはっきりと示すことができ、今後の制作、研究にも活かすことができる。絵を描く場合は、手元が明るくなくてはならないが、写真の場合、極端なライティングであっても問題なく良質な画像を得ることができる。合計で約1000枚ほどの撮影画像を保存することができた。

モデルを描くときは有志の学生にもその場を解放し、教育的な効果としての成果も、少しではあるが上げることができた。

今後は得られた画像を美術解剖学的に解析し、内部構造の図版を制作していくことを計画している。